慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	浅井紀氏学位請求論文審査要旨：明清時代民間宗教結社の研究
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	1987
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.57, No.2 (1987. 9) ,p.165(333)- 168(336)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19870900-0165

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

彙　報

浅井紀氏学位請求論文審査要旨

明清時代民間宗教結社の研究

中国の明清時代（一三六八―一九一一）の白蓮教や羅教の系統に属する民間宗教結社は、国家権力と対峙し、それ故に非合法とされ、屢々弾圧や迫害を受けたにもかかわらず、連綿と長期にわたって根強く存在し続けた。従って、これらの民間宗教結社について研究することは、明清時代の宗教はもとより、広く政治・社会・文化その他を知るために重要であるが、特に中国の近代史全般を支配者・権力者の側からだけではなく、被支配者・民衆の側からも考察するために最も必要であると言われている。

本論文は明清時代民間宗教結社についての代表的な学者として知られている著者が、多年にわたる研究成果をまとめたもので、九〇〇字詰用紙四五〇頁から成る大冊であるが、つぎの三篇に大別して論ぜられている。

第一篇　明清時代の宝巻と民間宗教

第二篇　明清時代の聞香教と清茶門教

第三篇　先天道の展開

以下に第一篇より順次、本論文の内容の概略を述べることにする。第一篇「明清時代の宝巻と民間宗教」は三章に分けられ、第一章「宝巻について」では、明清時代の民間宗教の特質を解明するために、白蓮教や羅教の経典として作られた一三種の宝巻を取り上げて、それぞれの宝巻の成立事情や内容を考察している。

第二章「宝巻の教義」では、宝巻の教義の基本的要素は無生父母信仰・浄土信仰・弥勒信仰の三つであるとし、それらの信仰について説明している。特に無生父母信仰は宇宙の本体とされる真空・虚空を神格化した無生父母を最高神として崇拝し、人類は無生父母によって創造された後、天上世界から地上世界へと降生し、地上世界での受難を経て、再び天上世界へ帰還すると説く信仰であり、この信仰が仏教の浄土信仰や弥勒下生信仰と結合した結果、明末より清代にかけて民間宗教結社が多数生まれて、しばしば王朝権力に対抗する民衆反乱を起こすに至ったと述べている。

第三章「聞香教と関係諸教派」では、明の万暦年間（一五七三―一六二〇）に直隷（河北）省灤州石仏口の王森が創始した聞香教と呼ばれる民間宗教について、その関係教派である西大乗教や大乗円頓教などと共に論じ、各教派の相互関係を明らかにしている。

そして第二篇「明清時代の聞香教と清茶門教」は本論文の中核を構成する部分であるが、つぎの五章に分けて論ぜられている。第一章「明末の聞香教に関する史料について」では、聞香

教を研究するための前提として、関係の各文献について史料批判を行なって、三群に分類し、『平妖奏議』など七文献を含む第一群に属する史料が内容において最も詳しく且つ信憑性も高いものであると述べている。

第二章「明末における聞香教の成立と展開」では、明末の万暦年間に創始された聞香教が急速に多数の教徒を獲得して、華北諸省に拡がり、荘田を保有して巨大な経済力も擁するに至った事情を考察している。

第三章「明末天啓二年の聞香教徒の反乱」では、この反乱は直隷（河北）省の王好賢・于弘志、山東省の徐鴻儒らが中心になって、明朝権力に対抗するために起こしたもので、聞香教の説く来世と現世の両面にわたる救済をめざした飢餓農民たちによる反官僚・反地主の闘争という性格をもつ明代最大の宗教的民衆反乱であったと述べている。

第四章「明末における奢安の乱と白蓮教」は明末の天啓元（一六二一）年に四川省で起こった白蓮教徒の反乱が、永寧宣撫使（猓玀族の酋長）奢崇明と水西宣慰使（苗族の酋長）安邦彦らの土司が率いる少数民族の反乱へと発展した事情を明らかにした論考で、次の如き内容である。奢崇明・安邦彦の乱は単なる少数民族の反乱ではなく、明末の諸状況を反映する性格の民衆反乱であり、その背景には万暦四十六（一六一八）年から始まった遼東における明軍と後金軍との戦争があった。当時、明朝は四川・貴州・雲南などの西南諸省から多数の土司の軍隊を遼東の戦場へ送り込んだが、これは西南諸省に動揺をもたらし、明朝と土司との対抗関係を生じた。そして、白蓮教徒が土司と結びついたために明帝国内の諸矛盾が集約される形で、奢安の乱が起こったと説いている。

第五章「清代の清茶門教」は明代の聞香教が清代に清茶門教と改名し、創始者王森の子孫一族を教主として二百年以上もの長い間、官憲の弾圧を避けながら秘密裡に布教活動を続けた経過を明らかにして、王氏を弥勒下生の一族として特別に崇拝する千年王国的救済の思想が民衆の間で如何に根強く保持されたかを示している。

最後に第三篇「先天道の展開」は清代中期から現在まで続いて来た先天道あるいは青蓮教・一貫道その他の名称で呼ばれる民間宗教結社について、以下の七章に分けて論じている。第一章「先天道の道統」では、一貫道の歴代祖師（教主）の事蹟、先天道で伝承される道統図および『還郷宝巻』などの比較考察によって、架空の祖師と実在の祖師とを判別して、先天道の創始から十一代までの祖師の道統を明らかにしている。

第二章「先天道の創始」では、清代中期の雍正年間（一七二三～一七三五）に江西省の黄徳輝が創めた無為金丹道が先天道の起源であるとし、その創始の事情を述べている。

第三章「道光青蓮教案」では、道光二十五（一八四五）年に起きた青蓮教徒に対する官憲の大規模な弾圧の顛末を解明している。

第四章「青蓮教の組織」では、官憲に捕えられた青蓮教徒の供述に基づいて、その組織を明らかにし、青蓮教の布教活動は

長江その他の水運ルートを利用して中国各地に広く及んだと推定している。

第五章「道統の再検討」では、『還郷宝巻』などの教徒側記録と『川匪奏稾』などの官憲側記録とを比較考察して、青蓮教の十二代以後の祖師の道統および道光年間以後の変遷を述べている。

第六章「先天道の教義」は先天道（青蓮教）の教義の中に反清復明の傾向があり、現実の秩序を否定する要素を含んでいたので、清朝官憲の弾圧を招いたことを指摘している。

第七章「斎匪と会匪」では、青蓮教徒は喫斎（肉食を断って精進すること）を特に重んじたので、官憲から斎匪とも呼ばれたが、反清復明の秘密結社として有名な天地会の会匪と結びついて、清末に揚子江流域一帯で民衆反乱が頻発したことを明らかにしている。

以上において、浅井紀氏提出学位請求論文の内容の概略を紹介したが、全体として頗る着実な構成をもって、優れて精緻な考察が行われている。上述の内容の紹介によっても本論文は甚だ多くの卓見に富むことが窺われるであろうが、なお特記しなければならないのは、従来全く知られていなかった重要な多くの史実を始めて明らかにしたことである。例えば、明末天啓年間の奢安の乱は早くから明代の大事件として『明史紀事本末』などに見えているが、これまで少しも研究したものがなかったので、その実態はもとより概略さえも明らかでなかった。奢安の乱が単なる土司の乱ではなく、白蓮教と緊密な関係を有する民衆反乱であったことなどは、本論文によって始めて明らかにされた重要な史実である。また天啓二年の聞香教の反乱については、先行の研究論文が既に幾つかあるが、何れも二次的、三次的史料によって、その概略のみを把握したものであったと言ってよい。先ず数多くの史料を蒐集して、次に史料批判を行ない、何れが一次的史料であるかを定めて、この明代最大の宗教反乱の正確な実態を明らかにすることは、本論文によって始めてなされたのである。

このような多数の史料蒐集と史料批判とは、本論文の全体を通じて見られる極めて優れた特色である。明清時代の民間宗教結社は官憲の弾圧を恐れて、非公開で秘密に活動した結果、その史料には客観的で詳細なものが少い反面、歪曲された記録が多いので、それらによって真相を究明することは容易でない。そのため本論文の著者は官憲側史料はもとより民間宗教結社側史料を利用するのみならず、その他数多くの文献を博捜して、関係史料を蒐集することに努めている。この結果、史料としての貴重な価値が本論文によって始めて明らかにされた文献は、例えば『平妖奏議』・『餐微子集』・『擒妖始末』・『撫畿疏草』・『蜀事紀略』・『乗城日録』・『督蜀疏草』・『川匪奏稾』などを始め頗る多いが、これもまた本論文の重要な貢献と言ってよいであろう。

ところで、本論文は民間宗教の教義に現実の秩序を否定する要素があることから、民間宗教結社の反官武装闘争を宗教観念に基づいた反乱として性格づけている。しかし、民間宗教結社

が常に支配権力に敵対的であったわけではない。本論文の著者自身が「入教する者の中には、個人的な幸福・安心立命を目的とする者も多かったと考えられる。全ての教徒が王朝権力を否定するような観念を持っていたとは考えられない。」（本論文四二九頁）と述べている如く、民間宗教結社は本来、安心立命や救済を求める集団であり、反乱を目的にして組織されたものではない。従って、たとえ教義に千年王国的信仰があったとしても、それが集団を結合させて現実に反乱行動となるためには、他の諸条件が集積したと考えるべきではなかろうか。本論文においても明末に白蓮教と土司とが結びついた反乱あるいは清末に青蓮教と会党とが連合した反乱について述べているが、更になお民間宗教結社の活動が支配権力に対する反乱として具体化されて行く過程で要因となった政治・経済・社会その他の諸条件を教義などと併せて一層深く追究することが望まれるであろう。しかし、これは勿論いわゆる望蜀の言であって、本論文の優れた成果を左右するものではない。

上記の如く、本論文は各種の文献から蒐集した数多くの関係史料を用いて、明清時代民間宗教結社に関する幾多の重要問題を解明したものであり、極めて高く評価されるべき研究であると考える。

以上の審査結果として、本論文の著者浅井紀氏は、文学博士の学位を受ける資格があるものと認定する。

昭和六十二年三月七日

論文審査担当者

主査　慶應義塾大学教授　和田博徳
副査　慶應義塾大学教授　可児弘明
副査　東京女子大学教授　山根幸夫

〔附記〕なお本論文の著者の学力確認は慶應義塾大学の伊藤清司教授および私が担当した。伊藤教授ならびに副査の可児・山根両教授に対し、茲に記して謝意を表する。

（和田博徳）

執筆者紹介

村山光一　慶應義塾大学文学部教授
宮崎　洋　慶應義塾大学商学部教授
戸沢行夫　東京歯科大学助教授
原　信芳　フェリス女学院短期大学講師
大嶽卓弘　埼玉県立衛生短期大学講師
中野高行　神奈川県立汲沢高等学校教諭
東京農業大学第三高等学校嘱託講師